４．６　ロシアと日本のはざまで

広瀬　健夫

(一)

私は、1977 年から 2006 年までロシアのカムチャッカ半島の田舎町、ペトロパヴロフスクで暮らし、そこの国立カムチャッカ教育大学で日本語、日本文化を学生たちに教えていた。

なんでまた、そんな所へ行ったのか、というと私は信州大学でロシア史を教えていたのだが、この先生、ロシアに行ったことがなく（当時はソ連時代で、外国人はかんたんにロシへ行けなかった)、ロシア語をしゃべったり、聞いたりすることも全くダメ、というダメ教師で、学生諸君には一応もっともらしい顔をして講義なるものをしては居たのだが、なんとかロシアでふつうの暮らしをしてみたい、ロシア語をなんとかペラペラにしゃべれるようになりたい、とずっと思っていた。

(二)

世の中というのは何がおこるかわからない。1991 年暮れにロシアの社会主義体制が崩壊し、それまで外国人の立入りを厳しく制限していたロシアの極東地域、とくに日本の文化、技術を受け入れたい、それにはまず日本語教育が必要で、そのためには然るべき日本語教師を招きたい、ということになったようだ。

その話を聞いたときには、私はもう６０歳を過ぎていたが、「然るべき」かはともかく、一も二もなくロシアに行くことにきめた。

1997 年 3 月に定年で大学をやめ、その年の 9 月 1 日から始まるロシア大学の新学年までの間、ロシア人はどんな生活をしているのかな、ロシアに 2, 3 年もいれば、ロシア語はペラペラになるだろうな、などと考える。それがまた楽しかった。言ってみれば遠足前の小学生のような気分だったのだろう。

(三)

ペトロパヴロフスク市に着いたのは、その年の 8 月 23 日頃だった。大学が用意してくれた宿舎は８０㎡ほどの３ＤＫで、寝具、食器なども

そろってあり、大学から徒歩３，４分で、市場も近く、家内と二人で暮らすのには、まず申し分ない。

住居が落ち着いて早速市内の探検に出かけた。少し行くと小さな川があり、そこで何人かが釣をしていた。近づいてみると、川を真黒にしてサケの大群があがってきて、すぐ釣れるのだが、折角連れた８０ｃｍほどのサケを無造作にすぐ捨てているのだ。あまりのことに私が下手なロシア語で「なんで魚を捨てはるのや」と聞いたら、むこうでもびっくりしたらしく「欲しいのならあげるよ」のようなことをいったようで、それからすぐに釣れた８０ｃｍほどのサケを２匹ビニールの袋にいれて私にくれた。

後で知ったのだが、カムチャッカでほしいのはイクラだけで、オスのサケなどハナもひっかけない、ということだった。

カムチャッカに到着して最初に体験した、この自然があふれかえっている現象に私は全く圧倒された。

（四）

はるか北にあるカムチャッカ半島は日本とほぼ同じ広さを持っているが、人口はほぼ４０万人程度で、州都ペトロパヴロフスク市も森の中に町がある、という感じでいたるところに雑木林がある。

近代化し、都市的な日本社会にどっぷりとつかっていた私にとって、これと全く対照的な、前近代的な田舎社会はおどろくことが多く、新鮮だった。

一例をあげると、街角のあちこちで、お乞食さんが小箱をもって物乞いをしている。それを見た日本人観光客は冷たく「汚らしい」というのがふつうだ。これに対してロシア人は、わずかな額だが小銭を箱に入れることが多い。そこに私はロシア人の暖かさを感じた（このことに関心が有ったので私は注意して観察していた）。そういえば、子供のころ（日本での話だ）、家へ物乞いに来たお乞食さんに母が何がしかあげていたことを思い出す。あの母の眼差しは暖かかった。

（五）

暖かく、優しい社会というのは気が安まる。私はカムチャッカに居たとき、まこと困ったらお乞食さんになればいいのだと思って気が楽になったことを思いだす。

いまの日本は自殺者が多く、学校でもイジメ、イジメ自殺、不登校などが多いようだ。豊かで、近代化し、都市化している日本社会は、それ故に気が安まらない社会になっているのではないか。豊かさを求めて競争することが結果的に他人のことを考えない、冷たい社会をつくりだしているのではないか。

少しつけくわえておくと、土地が広いカムチャッカでは各家族が郊外に３００坪ほどのダーチャといわれる農地を分与されていて、ロシア人は週末になるとそこへ行って、ジャガイモ、キャベツ、ニンジン、それにビニールハウスでトマト、キュウリなどを作っている。いわば、野菜は自給自足だ。私は隣家のリュドミラ一家に連れられて、よくそこのダーチャに行ったが、夏の夕方、軽作業を終えて、木かげのテーブルでそよ風に吹かれながら、とりたてのキュウリ、トマトで地ビールを飲んだ気分は、いや、もう、極楽だった。みんながささやかな土地を持って、そこで自分たちの野菜をつくる、というのはすばらしいことではないか。

（六）

ルソーは、全ての人が自由、平等、独立であるためには、全ての人が生きていける手段、食べていける程度の土地か、店か、仕事場をもっていることが必要だ。そうすれば人をやとったり、人に雇われたりすることが無いからだ、と述べている。

カムチャッカで人々がささやかな土地をもって自分たちの食べる野菜をつくり、川で魚をとっている生き方に私は日本にない、前近代的な、疑似ルソー的な、おおらかさ、自由を感じた。カムチャッカでのロシア人の生き方が私の波長にあっていたのだろう。

カムチャッカの生活が気に入って、カムチャッカの土になるのも悪くないとまで考えたが（ここは土葬で本当に土になれる）、大学当局のやり方に抗議してクビになり日本に帰ってきた。

日本ではカムチャッカのように２０～３０坪ほどの小さな畠で野菜をつくり、近くの川で魚を釣る、仙人のような生き方をしたかったのだが、近くに良い図書館がほしい、などと近代的、都市的な願望もあって、田舎町の町はずれの７５㎡ほどの３ＤＫに家内と何ということもなく暮らしている。

ふりかえってみれば、小学校５年ぐらいの時「お前ら男の子は、人生２５年だ。早く大きくなって天皇陛下のために死ぬんだ」と教師に気合を入れられたが、それからもう８０年近く生きてきた。それでもとくに悪いところもなく、こうして能天気な太平楽を並べて居られるのだから、まあいいか、としなければならない、ということだろう。